第4章　考察

キャンパス内において現在まで明確に検出された遺構は数量的に多くはない。このことは調査面積の狭小さとも相俟って従来の調査が本学の統合移転にともなう緊急調査であり、遺構・遺物の埋存状況の把握に重点が置かれた結果でもあった。このような背景のもとに先にも述べた如く吉田遺跡調査団による調査はキャンパス内を南部を中心として五地区に大別し、調査規模は各々異なるが各地区について実施されており集落構成要素としての遺構を検出している。しかし、立地、住居の分布等から推して集落全体の規模はキャンパス内において収束するとは考えられず、集落全体の住居数、分布状況、変遷について知るすべをもたないが、ここでは吉田遺跡調査団による成果を踏まえた上で今回の調査をもとに断片的な姿としてキャンパス内で把握される集落の構造、変遷について概括的にまとめておくことにする[(1)]（Fig.44)。

現在のキャンパス内は後世の水田経営および本学の統合移転による造成工事のため旧来の丘陵、台地が削平され著しい景環の変化をみせているが、統合移転前の旧地形、水田地割および湖沼の分布等によって景環の復原はある程度可能かと思われる。すなわち、北部は標高約200mの姫山から南に向って延びる丘陵がキャンパス内中央部 $x=460$、$y=600$ 付近まで舌状に張り出し、東部においては標高約284mの今山から派生した丘陵が緩やかに西に向って延び台地状を呈していたものと思われる。そして、これら丘陵の基部には小規模な谷が数ケ所認められ谷奥部標高30～40m付近には谷頭池が点在する。

南部および西部は大塚川によって形成された扇状地上に立地している。現在の大塚川はキャンパス外約200m西方を南東から北西への流路をもっているが、水田地割から推してキャンパス内 $x=130$、$y=350$ 付近を北に向って流れていたことが伺われる。このことは吉田遺跡調査団によって昭和42年に検出された河川跡と符号し、少なくとも縄文時代晩期から古墳時代にかけての基本的な流路であったのであろう。この大塚川はキャンパス南部からその南方にかけての微高地西面を流路としている。このようにしてみると、キャンパス内中央部ならびに西部は大塚川による沖積作用および谷頭池よりの湧水作用によって広範囲に沖積低地が形成されていたことが推察される。

また、キャンパス内北端部は姫山西麓に沿って流れる九田川の、また、$x=950$、$y=150$ 以北は椹野川の氾濫原であることも確かめられている。

考　　察

以上のような集落立地が考えられるが、現段階ではキャンパス内においては縄文時代の住居は検出されておらず、南部において河川跡からわずかに晩期の遺物が出土しているにすぎない。住居跡として明確に把握されるのは弥生時代前期末頃で大塚川に近接して臨む $x=50$、$y=500$付近の微高地（A地点）西縁に立地する。検出されている住居は1基のみであるがキャンパス外へも微高地が延びていることを考えれば集落の規模はさらに拡大するものと思われる。しかし、全般的に前期末の集落はこの微高地の一部に展開した小規なものであったであろう。

弥生時代中期になると、南北二つの地域に集落が形成されるようになり[(2)]前期末に南部に営まれた集落は北および東への平面的、垂直的な居住区の拡大傾向を示すようになる。しかし、微高地の西面が大塚川、東面が周辺の谷頭池に源を発する河川の流路となっており、両河川に狭まれた地域、すなわち北限 $x=300$付近、東限 $y=650$付近、西限 $y=400$付近の範囲内をその居住区としたことが推察される。なお、この期の住居は $x=200\sim250$付近、$y=400\sim450$付近の区域（旧調査区第II地区北区）約1,400m²の調査で6基、$x=50$、$y=500$付近の調査で少なくとも1基検出されている。居住区と推定される範囲内において未調査地区も多くその詳細は不明であるが、前者の地域での住居の分布密度から推して少なくとも微高地北縁部への進出傾は伺えよう。

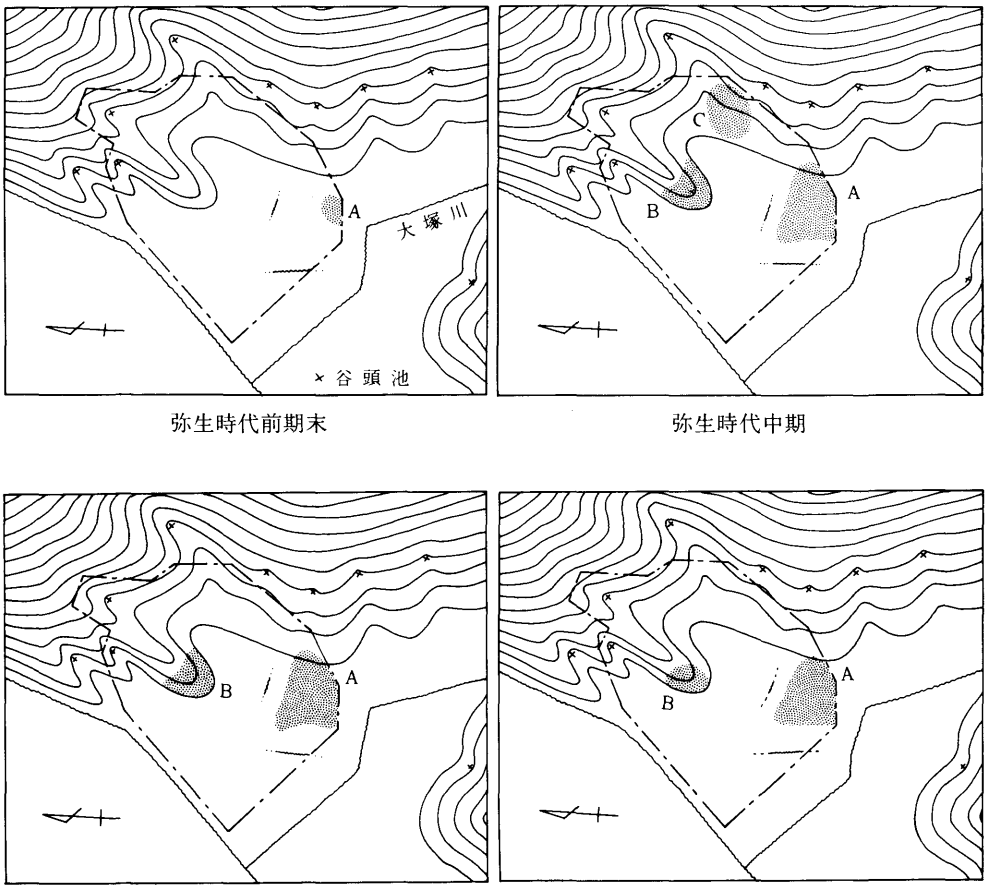
また、この期には南部に営まれた集落と直線距離にして約350m北方の丘陵（B地点）西縁部にも集落が形成されるようになる。検出されている住居は2基以上であるが、調査自体丘陵全体に及ぶものでなく、かつまた調査面積も狭小なため各住居の配置、分布状況、集落の構造等について不明な点が多い。しかし、昭和54年に実施したL－14区の調査で調査区中央部においてこの期の土壙が検出されており、$y=575$付近から南西に向って地山は急激に下降している。また、昭和46年には $x=480$、$y=690$付近（N－14区）で約2000m²に及ぶ調査が実施されているが、この調査区域内にこの期の住居は検出されていない。丘陵基部への集落の展開は北西部への丘陵の延びが小さいことも勘案すると、少なくとも東西幅約120m、南北幅約200mの範囲内にこの期の集落が営まれていたようであり、微高地上に形成された南部の集落にくらべ集落規模は小さかったことが伺える。

しかし、具体相として把握されている中期の住居は少なく時期的に細分されたなかでの各住居のあり方、群としてのあり方については不明な点が多い。集落構成要素としての資料の増加が期待されるが少なくともこの期においては二つの集落がキャンパス内に営まれており、南部の集落においては立地条件および住居の分布密度から推してかなりの数の住居

が存在していたことが予想され、北部の集落に対して拠点集落的な性格を具備していたことが考えられる。

また近年、集落構成単位としての生産・消費の基礎単位となる住居群（単位集団[3]、家族集団[4]）の抽出が行なわれ集落の具体的な構造、性格の解明が試みられている。本遺跡においても中期後半の時期に前面にひろがる低湿地における水田耕作を基盤とした経営、消費単位としての住居群が南部の微高地上では少なくとも３グループ、北部の丘陵上では少なくとも１グループ存在したことが予想され、個々の住居群の有機的な連関、相互補完的な連鎖のなかで集落が形成され、より高度のレベルで集落が結びついていたことが予想される。

後期において知られている住居はわずかでＡ、Ｂ両地点とも各１基である。Ｂ地点にお



弥生時代前期末　　弥生時代中期

弥生時代後期　　古墳時代前期

Fig.44　集落変遷模式図

いては丘陵の東部縁辺にも住居が営まれるようになるが、基本的には中期における居住範囲を大きく逸脱することなく集落が展開したものと思われる。

ここで中期後半から後期（前半）にかけての住居の平面形態および床面積の平面的変化をみてみよう。中期後半における円形および方形の平面形態の割合は、井上山遺跡[5]で円形と方形の割合が８：３、本遺跡においては４：１である。後期（前半）においてはまとまって検出された住居は少ないが本遺跡においてその割合は２：３と逆転する。

Tab.7 竪穴住居平面形態および床面積

	平面形態	床面積(㎡)
弥生中期後半	円　形	23.2
	円　形	32.2
	円　形	38.5
	円　形	62.2
	隅丸方形	27.4
弥生後期（前半）	円　形	19.1
	円　形	34.2
	隅丸方形	12.7
	長方形	13.2以上
	長方形	16.0

従来、北部九州においては弥生時代中期中葉から後葉にかけて円形から方形への住居の平面形態変化がおこり、後期以降方形プランの一般化によって円形のものは消失し以後次第に長形化してゆくとされている。しかるに本遺跡を例にとると後期（前半）においても円形は残り、円形から方形への推移は中期後半～後期（前半）にかけておこっていると見てよく、北部九州地区よりも時期的にやや遅れるものと思われる。そして後期後半になると、朝田墳墓群第II地区[6]、北迫遺跡[7]等でみられるように方形が一般化する。このように、平面形態の移行は床面積の縮少をともない少なくとも後期（前半）の段階で方形プランの住居の床面積は20㎡以下となり、以後平均的な床面積を保つようになるものと思われる。

中期後半から後期（前半）にかけての円形から方形への平面形態の変化並びに床面積の縮小は、前期から中期にかけての平面形態の変化ともあわせて単なる住居のもつ構造に起因するものなのか、さらには集落内部での個々のあるいは全体としての住居のあり方に起因するものなのか今後検討を要するであろう。

古墳時代前期になると住居こそ検出されていないが、キャンパス内東部の微丘陵（Ｃ地点）上からこの期の遺物が出土しておりＣ地点にも集落が形成されていたことが予想され、三つの集落が存在していたことがうかがわれる。しかし、これらの三集落は無秩序に形成されたものではなく自然環境に規制された立地のあり方を示しているといえよう。特にＡ地点においてみられるごとく河川の流路によってとり残された微高地上に集落が展開しているようにＣ地点においても周辺の谷頭池に源を発する小川跡に狭まれた微高地上に集落が形成されている。

考　　察

個々の住居の規模はＢ地点においてその傾向が認められるが、４基検出された住居は少なくとも新旧二時期にわたって営まれたようである。古い時期の住居は２基で隅丸方形、隅丸長方形の二つのタイプの平面形態がみられ、床面積は前者が23.4m²、後者が31.6m²である。新しい時期の住居はいずれも平面形態隅丸方形で床面積は16.2m²、11.2m²の２基である。Ｂ地点でのわずかな例をとってみると古墳時代前期において時期的に後出のものには規模の小形化の傾向が伺える。

中・後期の明確な住居はＡ・Ｂ・Ｃ三地点においては検出されていないが、土壙、柱穴等が認められておりその存在は十分予想される。また $x=700$、$y=750$付近では後期の住居跡２基以上が検出されており狭い谷を臨んだ丘陵縁辺部高所にも集落が分散していたことを伺わせる。

以上述べたように弥生時代前期末頃にキャンパス内に形成された集落は、中期に移ってその前面にひろがる肥沃な低湿地における水田耕作を基盤に内部成長を遂げたであろう。それはとりもなおさず、血縁協同体として把握されるであろう家族集団の成長を意味し、中期後半における集落のあり方にも暗示されているといえる。しかし、こうした集落のあり方はそれ自体無秩序な膨張を意味するものではなく、生産基盤とする農業経営にかかわる協業を一つのモメントとして、より高位のレベルの集団の規制のもとに収斂していったものと推察される。

今後キャンパス内における資料の蓄積をまって、集落と不可分な葬制のあり方を含めて集落構成の基本単位としての家族集団の具体的なあり方、成長の過程についてアプローチしてゆきたい。

〔註〕
(1) 吉田遺跡調査団による調査の成果報告はなされておらずその詳細は不明である。
(2) 現在までのところ弥生時代中期前葉、中葉の住居は知られていない。
(3) 近藤義郎　「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号　1959
(4) 高倉洋彰　「弥生時代社会の研究」　寧楽社　1981
(5) 井上山遺跡発掘調査団　「井上山」　1979
(6) 山口県教育委員会　「朝田墳墓群Ⅴ」　山口県埋蔵文化財調査報告第64集
(7) 小野忠熙他　「北迫遺跡」　『宇部の遺跡』　1968